

## 教育番組の評価研究に関する一考察

村 川 雅 弘

### 1. はじめに

「放送番組のタクソノミーの開発および視聴学習行動の基礎研究」の研究グループの中で、私が主に研究・報告してきた研究領域は『教育番組の分析・評価』である。評価を考える際には、一般的に次のようなものが問題になる。(1) 評価の目的（何のために評価するのか）、(2) 評価の内容（何を評価するのか）、(3) 評価者（誰が評価するのか）、(4) 評価の時期（いつ評価するのか）、(5) 評価の方法（どのようにして評価するのか）である。

その中でも、評価ということになると、何のために評価するのかということが最も重要である。評価の目的によって、評価の内容・評価者・時期・方法が決まってくる。これまでの番組分析や評価の研究事例を次の3つの評価目的に分けて整理・検討し、その中で現在私が進めている研究を紹介する。

- (1) 番組制作や改善のためのフィード・バック情報を得るための評価
- (2) 保育や授業における番組の効果的な利用法を検討するための評価
- (3) 自作番組を制作するための手立てを明らかにするための評価

### 2. 番組制作や改善のためのフィード・バック情報を得るための評価

教育番組の評価ということになると、やはり番組改善のための評価が主流になるだろう。制作者が番組で伝えようとしたことがどのくらい視聴者に伝達されたのか、改善するとすれば何処をどう改善すればよいのかといった情報を得るための評価である。つまり、「送り手」としての番組評価である。

この番組改善のための評価が最も盛んに行われたのは、学校放送番組が世に出た昭和30年代である。NHK放送文化研究所（今のNHK放送文化調査研

研究所の前身)が中心となって行った「学校放送番組の評価」に関する一連の研究<sup>1)</sup>である。番組制作者に近い立場の研究者が主体となって、番組制作や改善のためのフィード・バック情報を得ることを目的として行った。プログラム・アナライザーや、質問紙調査を主に用いて番組評価して、その後の番組研究の評価方法のモデルとなった。また、秋山隆志郎が「この一連の研究は、初期の学校放送テレビ・ラジオの制作についての基本原理を考える上に多面的に資料を提供し、今日のテレビ・ラジオの学校放送番組演出の基礎をきづくデータをそろえたといえよう」<sup>2)</sup>と述べているように、この研究で学校放送番組の制作の体制が決まったとされている。

その後、同じくNHK放送文化研究所の菊池信彦による「番組構成と理解度の研究」<sup>3)</sup>や多田俊文による「映像とコメントの効果の研究」<sup>4)</sup>、「映像認識やモンタージュ理解、文脈や主題の把握に関する発達研究」<sup>5)</sup>などの映像と理解に関する基礎的な研究、あるいは小倉喜久による『テレビの旅』や『明るいなかま』を使った番組研究<sup>6)</sup>が進められた。このような番組制作に関わるような基礎的な番組研究はNHKの番組制作者に近い存在の研究者によって、昭和30年代後半から40年代前半まで精力的に続けられた。しかしその後、NHK放送文化研究所が毎年継続している全国学校放送利用調査という形の番組評価や学校現場での教師による番組研究は残ったけれども、番組の内容や構成のありかたに関して真正面から取り組む、番組制作にフィード・バックできるような研究は殆どされなくなった。

番組研究が再び見直されてきたのは昭和50年代の半ば、ニューメディア時代を迎え、メディア教育の必要性が放送教育関連諸学会や学校現場で論議され始めた頃からである。例えば、坂元昂や秋山隆志郎らによる「2歳児におけるテレビの注視行動」に関する研究<sup>7)</sup>がある。保育に欠ける子どもを引きつけ、よい方向に発達させる機会を果たすことのできる番組づくりを目指して、2歳児の発達を促進するのに効果のある番組特性を分析したものである。子どもの発達段階から、番組に対する子どもの注視行動をチェックする方法を取り入れた。

さて、私が関わっている研究の中で送り手の論理で進めている研究として、「教師教育用視聴覚教材の開発と評価に関する研究」8)がある。これは文部省の科学研究費自然災害特別研究のサブプロジェクトとして行っているものである。現場教師向けの「地震防災教育用」の視聴覚教材で、学校地震防災への意識が低く、また情報も十分に持っていない現場の教師に対して問題意識を起こさせ、かつ学校防災を考える上で基盤となる情報を提供できる番組を制作しようとするものである。

昭和58年5月に起きた日本海中部地震と59年9月に起きた長野県西部地震の取材及び調査に基づいて構成した。長野県西部地震に遇った王滝小中学校の地震当日の学校や子供の様子、問題になった場面、学校の対応などを中心にした番組構成である。現地で手に入れた映像や写真、取材の場面などを使って大学の研究者が構成・編集をして試作版を制作し、最終的にプロの番組制作者の協力のもとに完成版を制作するという手順を踏んだ。試作版と完成版の間に次のような評価を実施した。

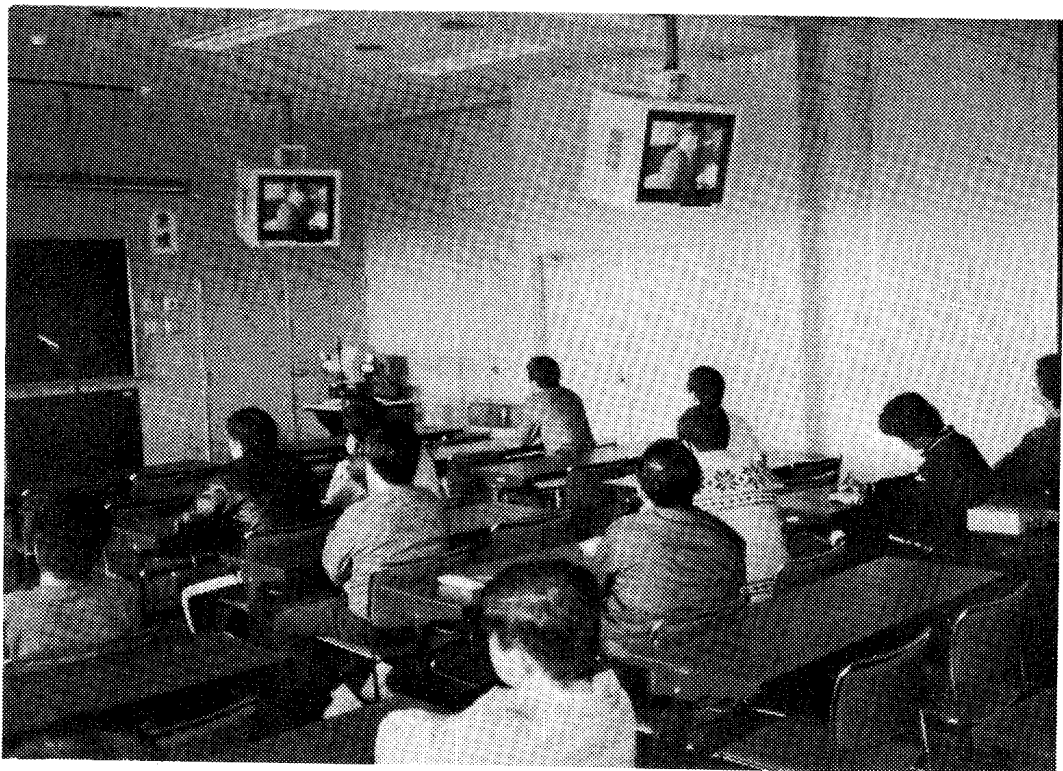


図 1

① 現職の教師40人（鳴門教育大学の大学院生）による番組評価——1)自由記述方式による印象場面・不足点の分析，2)質問紙法による番組内容と制作上の問題点の分析，3)アナライザーによる興味度と改善度の分析，4)教材改善シートによる内容，映像，音声等の問題点の分析，5)事前・事後の集団討議による発言内容に基づく伝達情報の分析。

② 番組制作専門家による番組評価——番組の内容，構成，技術的側面等に関する意見聴取

さて，試作版に関する番組評価研究を経て，次のようなことが明らかになった。

まず，私達研究者が作った試作版の技術面以外の問題点として特に指摘されたのは，番組構成の論理性である。私達が作った場合，どうしても論理的な展開になってしまう。番組の流れの論理性を重視する余りに非常に固い番組展開になってしまい，むしろ受け手である教師に私達の伝えたいものが伝わらないのである。また，番組の中に必要な情報を盛り込みすぎる，番組の起承転結を重視する余りに教師に考える余地と力を与えないという問題点が明らかにされた。そのため，完成版では番組内容をできるだけ精選し，オープンエンドにした。この番組を教材パッケージ全体の中での基幹教材としての立場をより明確化するためにも，起承転結の結の部分は補助教材として別に制作した。

### 3. 保育や授業における番組の効果的な利用法を検討するための評価

昭和50年代に入ると大学の研究と現場の教師が協力して行う番組評価研究が盛んになってくる。番組制作のためのフィード・バック情報を得るというよりもむしろ放送を使った保育や授業に生かせる情報を得るための研究である。つまり，番組の「受け手」としての番組研究である。番組の特徴を明らかにし，番組制作者の意図と子どもの理解度との関連を探ることで，教師は保育や授業の中で番組をどう位置づけ，どう指導していけば効果があるのかを検討するためのフィード・バック情報を得ることができるのである。

例えば，井口太や小川博久ら<sup>9)</sup>は『なかよしリズム』や『できるかな』とい

った幼児教育番組を用いて、番組が幼児の音楽鑑賞や造形表現、言語発達の教材としてどうあるべきかを明らかにしようとした。山口博美<sup>10)</sup>による学校放送理科番組の教授性の分析を通して、画像とバーバルな活動との関連、「予想→実験→命題の定式化」といったパターンを明らかにしている。斎藤武也ら<sup>11)</sup>による社会科番組に対する児童の反応と番組構成要素や番組内容の流れの関連をみたり、テレビ視聴中の児童の表情との関連を追求することで、一般に実施されている担任教師による視聴中の児童の表情・態度の主観的な観察の有効性を検討した。

また、水越敏行や吉田貞介が中心となり、金沢市や名古屋市、京阪神の現場と共同で進めてきた一連の研究、NHK学校放送番組『みどりの地球』を用いて行った視聴能力と探索意欲・拡散思考の研究<sup>12)</sup>や番組からの発展学習に関する研究<sup>13)</sup>、写真法による理科番組の評価に関する研究<sup>14)</sup>、『みどりの地球』の番組分析と評価の研究<sup>15)</sup>なども同様である。

私が最近関わっている研究の中でこの分野に関するものとして、大阪大学と共同で行った「小学校社会科番組の比較研究」<sup>16)</sup>がある。近畿地方では、小学校4年生の社会科番組としてNHK学校放送番組の『わたしたちのくらし』と毎日放送の『わたしたちの近畿』の二つのシリーズがある。両者ともに学習指導要領に準拠しているために非常に似通った番組を制作している。たとえば、昭和61年度1学期12番組を比較してみると、表1に見られるように8つの番組がほぼ同じテーマで放送している。

このうち、番組のペア4つを選んで現職の小学校の教師4名に比較・検討してもらった。教師自身が読み取った番組のねらい、各番組の特長と問題点、番組の活用法（授業で使うとしたらどんな使い方をするか）をたずねた。また、『わたしたちのくらし』の「ゴミはどこへ」（5月12日放送）と『わたしたちの近畿』の「ごみのゆくえ」（5月2日放送）のペアについては各番組制作担当者によるインタビュー調査と小学校5、6年生による質問紙調査を実施した。

この研究により次のようなことが明らかになった。

表1 『わたしたちの近畿』と『わたしたちのくらし』の昭和61年度1学期  
分——同一テーマ放送分のみ——

わたしたちの近畿	(放送日)	わたしたちのくらし	(放送日)
③ ごみのゆくえ	(5. 2)	④ ゴミはどこえ	(5.12)
④ 大阪の上水道	(5.16)	② 水はどこから	(4.21)
⑥ 大阪の下水道	(5.30)	③ よごれた水のゆくえ	(4.28)
⑧ 火さいをふせぐ	(6.13)	⑨ こちら119番	(6.16)
⑨ 公害をふせぐ	(6.20)	⑤ 公害のないまちを	(5.19)
⑩ 交通事故をふせぐ	(6.27)	⑧ 交通事故をなくす	(6. 9)
⑪ 地しんにそなえる	(7. 4)	⑫ 地震にそなえる	(7. 7)
⑫ 水害をふせぐ	(7.11)	⑪ 水とたたかう	(6.30)

(○内数字はシリーズ内番号)

① 同じ学習指導要領に準拠しながら制作されている番組であるにもかかわらず、放送局によって番組制作の目的が全く異なる。『わたしたちのくらし』の方は学習指導要領を踏まえながらも、教科書があまり扱わない情報や現場の教師があまり知らない情報を提供しようとしているのに対して、『わたしたちの近畿』の方はできるだけ教科書に準拠して、現場の教師のニーズに応じた情報を提供しようとしている。

② 番組の持つ特長と問題点とは表裏一体の関係にある。たとえば、「ゴミはどこへ」の場合、ごみ処理の新しい情報やごみ再利用の情報を中心として番組構成をしているため、ごみに関する新しい情報を知ったり、前向きに取り組もうとする態度を持たせるのに有効な反面、ごみに対するポジティブなイメージを持ち過ぎて、ごみ投機を容認する意識を持たせる危険がある。それに対して、「ごみのゆくえ」の場合は、ごみの問題に真正面から取り組み、ごみ投機の問題、処理の困難さを理解するには有効である反面、情報に新鮮さが無いとの指摘があった。実際に番組を視聴した子どもは、番組の特性に関連したイメージを持つことが明らかになった。

③ 以上のことから、番組の特性を十分に理解して、特性に応じて使いこなすことが必要である。場合によっては、両方の番組を使うことによって、各番組の特長を生かしながらも、問題点を補完するといった利用の仕方をもっと考慮すべきだという意見が多かった。

#### 4. 自作番組を制作する手立てを明らかにするための評価

大阪大学が昭和61年に行った調査<sup>17)</sup>によると、いま学校に導入されているビデオカメラの台数は平均2台強である。現時点では、まだまだ学校行事等の記録としての使い方が中心であるが、一部のマニアの教師や先進的な学校では自作番組が制作され、授業に生かされている。ビデオ関連機器がさらに安価になり、操作がますます簡便化するに従って台数も増え、番組自作が盛んになってくるものと思われる。

さて、その際に考慮しておくべきものが2つある。1つは、番組制作のノウハウである。単に写せば良いのではなく、番組制作には必要最低限の知識や技法がある。教材であるだけに、番組としてある程度の質は必要である。自作番組を制作しようとする教師に最低限必要とされるノウハウはなにかを明らかにすることが今から必要とされてくる。

2つめは、「自作性」の問題である。素人である教師はどんなに努力しても番組制作のプロに勝てないものがある、逆に子どものことをよく知っている、教育を知っている教師にしか出せないものがある。番組のノウハウを追求する一方で、現場の教師が番組を自作する特長は何かを明らかにしておくことが必要である。

そこで、番組制作のノウハウを盗むために、一つの方法として番組制作のプロがつくった番組を分析・評価するというアプローチがある。つまり、番組の「作り手」としての番組評価である。このタイプの研究はあまりない。しかし、観点を変えれば、これまで述べてきた2つの番組評価研究の成果の一部はこのフィード・バック情報となりうる。ただ、先にのべた教師の「自作性」を明らかにするためにはプロの作った番組の分析・評価では不十分である。一方で、

実験的に教師が番組を自作し、授業での実践を通して、子どもの目を通して評価し改善していく中で教師の自作性が明らかになっていくだろう。

これに関連した研究として、「現職教師向け自作番組制作カリキュラムの開発と評価」というテーマで、放送文化基金より研究助成を受けて研究を進めている。その中のサブ研究として、NHK学校放送番組・小学校社会科5年『リポートにっぽん』『大鳴門橋ができて』（昭和62年1月27日放送）の分析・評価研究<sup>18)</sup>がある。私と現職の小学校教師である鳴門教育大学の院生数名とロケの同行取材をした。その経験と、10名の現職の小学校の教師による番組評価結果、及び小学校5年生4学級の児童による視聴反応結果を踏まえて、3時間に及ぶインタビューを番組制作のスタッフに対して実施した。その結果、次のようなことが自作番組を制作していく際の留意点として分かった。



図 2

① 番組の基本は映像であるから、できるかぎり映像や映像と映像のつながりに重きをおいて、コメントやテロップは必要最少限に留めるべきである。



② BGMや効果音は使い方によって違ったイメージになるので効果的に活用する必要がある。

③ 映像で語ろうとするあまりに、カメラワークや特殊効果を多用するのは邪道である。本当に必要な場面での効果も薄れる。

④ 物を写す場合、まず、基本は対象物を十分に理解することである。そうすることによって、何処をどう撮ればよいのかが明確になる。

## 5. まとめにかえて

私は、番組研究に関して、どちらかと言えば「受け手」としての立場で番組を分析的に捉えることが多かった。総合的な評価の重要性を感じて行った研究は、「環境教育番組の総合的評価」からである。分析的な番組研究に加えて、総合的な目で番組を捉える、「送り手」「作り手」としての立場で番組を見直してみる必要性を、61年度に行った3つの研究でますます強く感じた。つまり、番組制作者の意図は何か、視聴者に何を伝えようとしているのか、そのためにどのような手法を使っているのか、果たしてその意図が視聴者にどう伝わったのか、これらの一連の関係を明らかにすることである。

番組制作者の表現形式は多様で、個性に富んでいる。番組構成、カメラワーク、カメラアングル、特殊効果、BGM、効果音、テロップ、ショットの長さやテンポ等々である。限られた番組の中で、多様な表現形式を駆使して、番組を構成している。この作業は、授業目標や単元目標の実現のために、メディア教材、学習活動や発問などを駆使して、授業や単元を設計する教師の活動に共通するものがあるかもしれない。番組研究のアプローチの仕方として、授業研究の研究法を使うことで、新しい有効な知見が得られるのではないだろうか。今後は授業研究の研究法も組み入れ、総合的な番組評価研究をさらに進めて、教育番組のタクソノミー開発につなげて行きたい。

〈注〉

- (1) 稲生和子、岩生直子他「学校放送番組の評価 1 ～ 1 4 」NHK文研月報 ( 1 9 6 1 ～ 1 9 6 4 ) .
- (2) 秋山隆志郎「映像の教育効果に関する研究」『映像と教育』日本放送教育協会 ( 1 9 8 0 ) 第 I 部第三章 9 1 - 1 2 8 .
- (3) 菊池信彦「通信高校講座〈数学 I 〉の番組評価調査(1)」( 1 9 6 5, 7 ) , 「理解度は番組構成によってどう変わるか(1)～(3)」( 1 9 6 6, 5 ～ 7 ) とともにNHK文研月報 .
- (4) 多田俊文「子どもの思考力からみた番組のあり方に関する実験研究」NHK放送文化年報 ( 1 9 6 6 ) .
- (5) 多田俊文「映像認知の発達に関する研究」NHK放送文化年報 ( 1 9 6 8 ) .
- (6) 小倉喜久「児童反応からみた〈テレビの旅〉の映像分析 I, II 」山梨大学教育学部研究報告第 2 0 号・2 1 号 ( 1 9 6 9, 1 9 7 0 ) , 「〈明るいなかま〉の映像分析」山梨大学教育学部研究報告第 2 7 号 ( 1 9 7 6 ) .
- (7) 白井常・坂元昂『テレビは幼児に何ができるか, 新しい幼児番組の開発』日本放送教育協会 ( 1 9 8 2 ) .
- (8) 佐古秀一・村川雅弘「教師教育用視聴覚教材の開発と評価」第 2 3 回日本視聴覚教育学会・第 3 1 回日本放送教育学会研究発表論文集 ( 1 9 8 6 ) .
- (9) 井口太・小笠原邦枝「幼児の音楽リズム鑑賞教材としての放送番組の評価」第 2 0 回日本視聴覚教育学会・第 2 8 回日本放送教育学会研究発表論文集 ( 1 9 8 3 ) . 小川博久・河合万里絵「幼児の造形教材としての放送番組の評価」第 2 0 回日本視聴覚教育学会・第 2 8 回日本放送教育学会研究発表論文集 ( 1 9 8 3 ) , 小川博久・廣田香代他「幼児の言語教材としての幼児放送番組の評価」第 2 1 回日本視聴覚教育学会・第 2 9 回日本放送教育学会研究発表論文集 ( 1 9 8 4 ) .
- (10) 山口博美「学校放送番組の教授性に関する分析」第 2 1 回日本視聴覚教育学会・第 2 7 回日本放送教育学会研究発表論文集 ( 1 9 8 4 ) .
- (11) 斎藤武也・坂元昂「放送番組の効果 — 小学校社会科学学校放送番組の時系列分析 — 」第 2 0 回日本視聴覚教育学会・第 2 8 回日本放送教育学会研究発表論文集 ( 1 9 8 3 ) .
- (12) 水越敏行・金沢市放送教育研究グループ「テレビ視聴能力と拡散的思考に関する調査」金沢大学教育学部紀要第 2 3 号 ( 1 9 7 4 ) , 水越敏行・金沢市放送教育研究グループ「テレビ視聴能力と探索意欲・拡散的思考に関する調査(2)(3)」大阪大学人

間科学部紀要第2巻・金沢大学教育学部教育工学研究第1号(1976)。

(13)(14) 水越敏行編著『視聴能力の形成と評価 ― 新しい学力づくりの提言 ―』の1章と2章 日本放送教育協会(1981)。

(15) 村川雅弘・河野恒興・中島正次「環境教育番組の分析」第20回日本視聴覚教育学会・第28回日本放送教育学会研究発表論文集(1983), 村川雅弘・田中博之「環境教育番組の総合的評価の試み」視聴覚教育研究第16号(1985)。

(16) 村川雅弘「メディア教育の動向と課題」『授業研究情報No.3』明治図書(1987)。

(17) 村川雅弘「小学校社会科番組の比較研究」水越敏行・京都放送教育研究協議会編『放送教育をかえる』日本放送教育協会(1987)。

(18) 村川雅弘・大隅紀和「現職教師向け自作番組制作カリキュラムの開発と評価」第4回日本科学教育学会研究会発表資料(1987)。

(本論文は、「放送番組のタクソノミーの開発および視覚学習行動の基礎研究」の研究会で発表した内容をもとにまとめた。)